様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月　24 日現在

機関番号：１６１０２
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2011～2012
課題番号：２３７００９７４
研究課題名（和文）　社会系教科における学習評価方略の開発と検証
研究課題名（英文）The Logic behind Learning Assessments in Social Studies Lessons

研究代表者
井上　奈穂（INOUE NAHO）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・講師
研究者番号：００５８０７４７

研究成果の概要（和文）：本研究では、社会系教科の代表的な授業観（理解、説明、意思決定）を取り上げ、それぞれに対応した学習評価の方略の開発及び検証を行った。また、学校で行われている学習評価方略との比較から、研究上の論理と現場の論理の相違点を明らかにした。このことにより、学習状況の適確な判断につながる学習評価の方略の在り方について意義のある提案を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This study explains the logic behind learning assessments in social studies lessons. I develop a learning assessment strategy that corresponds to the concepts of teaching and learning social studies, and verify its applicability. Next, I compare researcher–practitioner logic in school and clarify their differences. This study clarifies four learning assessment strategies for the accurate judgment of learning situations by teachers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1，000，000	300，000	1，300，000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：科学教育・教育工学，教育工学
キーワード：学習評価、授業観、社会系教科、授業実践、学力保障、授業者、学習者、方略

１．研究開始当初の背景

社会系教科には、多様な授業観が存在するが、それらの学習評価の方略のほとんどは知識の獲得の有無を確認するものであり、多様な社会系教科の授業観に対応したものとなっていない。この背景として、社会系教科の先行研究の多くが、授業実践及び授業計画レベルの提案であり、授業で目指されている理念を学習評価の方略のレベルで具体化することが少なかったことを挙げることができる。そのため、学習評価は、経験的、感覚的なものが多く、方略そのものの理論が明らかにされることがなかった。

以上の問題意識から、授業観に対応した学習評価の方略の開発と検証による、学習評価から見た社会系教科の再検討が必要であると考えた。

２．研究の目的

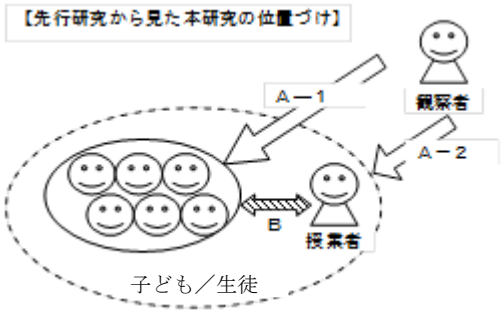
本研究の目的は、社会系教科の代表的な授業観に対応する授業実践及び授業計画の分析を踏まえ、それらに対応した学習評価のための方略の開発及び検証を通して、学習評価方略の理論的背景を明らかにすることである。

以下、社会系教科の先行研究に対する本研究の位置づけを明らかにする。

（１）子ども／生徒の学習状況を的確に評価することは、教育現場において最も必要とされる。適確な評価を通して得られた情報は、子ども／生徒の学力の向上にとって有益である。しかし、そうでない場合にもたらされる不利益は大きい。そのため、学習評価は、常に、客観性、妥当性、信頼性についての吟味が不可欠であり、特に評価者の主観をどのように排し、公平な判断を行うのかの検討が求められてきた。このような問題に対し、これまでの学習評価に関する研究は、評価者を「Ａ．観察者」として位置付けることによって、その客観性、妥当性、信頼性を保障しようとしてきた。

その結果、客観的な立場の「Ａ．観察者」が、「Ａ－１．子ども／生徒の実態」もしくは、「Ａ－２．授業における授業者の指示、発問、教材の実態」を明らかにするという研究がほとんどであった。

それに対し、本研究は、評価者を「Ｂ．授業者」として位置付ける研究である。以下に示すのは、本研究のアプローチと先行研究のアプローチを比較したものである。



まず、Ａ－１．に位置づく研究では（1）アンケートや先行研究の分析により、子ども／生徒の実態を明らかにするもの、（2）授業の結果として見られる生徒の実態を明らかにするものが挙げられる。このような研究の先駆的なものとして、(1)は藤井千之助の研究（藤井千之助『歴史意識の理論的・実証的研究』風間書房、1985 年）、(2)は重松鷹泰・上田薫による研究（重松鷹泰・上田薫『ＲＲ方式－子どもの思考体制の研究－』黎明書房、1965 年）が挙げられる。これらの研究により、限定的な結論ではあるが、対象となる子ども／生徒集団の実態が、論理的、統計的に示され、藤井、重松らの研究の後も多くの研究が蓄積されている。このような研究は、授業者の生徒理解を促す上で、有効な情報を与える。

一方、Ａ－２．に位置づく研究では（3）授業もしくは教材の「有効性」を明らかにするものが挙げられる。このような研究の先駆的なものとして、(3)池野らによる一連の共同研究（池野範男ほか (2008)、中学生の平和意識・認識の変容に関する実証的研究－単元「国際平和を考える」の実践・評価・比較を通して－、広島平和科学、30、広島大学平和科学研究センター、pp.71-93.）がある。池野らは対象となる授業・授業構成論もしくは教材に基づいた授業を実施し、当該実践を通して見られた生徒の変容をプレテスト、ポストテストから判断し、授業・授業構成論もしくは教材の有効性を示している。このような研究は、実施する授業・授業構成論、もしくは使用する教材の有効性の保証という点で有効な情報を与える。

Ａ－１、Ａ－２のアプローチに対し、本研究は、授業を行う「Ｂ．授業者」を評価者とするアプローチをとっている。これにより、授業者自身の授業観に基づいた授業を行う上で、「子ども／生徒」をどのように評価しているのかという意味での学習評価を想定することが可能となる。

本研究では、社会系教科において、一般的に取り上げられる３つの授業観（理解、説明、意思決定）を取り上げ、授業者の立場から見た学習評価について、理論的に、実証的に明らかにする。

（２）申請者はこれまで、学習状況を判断しうる学習評価の在り方について、内外の評価実践の分析及び開発を行ってきた。まず、「社会認識形成を通して市民的資質育成を図る」という社会科の基本的性格に一応合致した学習評価を体現したものとして位置付けられている（棚橋健治（1999)、社会科の本質と学習評価－アメリカ社会科学習評価研究史の位相－、社会科研究、51、全国社会科教育学会、pp.1-10.）ハーバード社会科の問題場面テスト SIAT（Social Issues Analysis Tests）を分析し、客観的な評価の判断基準を明らかにした。さらに、池野らの共同研究に参加し、授業実践や子ども／生徒の変容を的確に判断しうる判断基準の作成及び、エビデンスを踏まえた変容の確定などを行ってきた。以上の研究を通して、中学校、高等学校の実際の現場において、客観性、妥当性、信頼性を求める学習評価の在り方は、授業者にとって、非常に困難であること、また、過度のエビデンスを求めることで、授業者の負担

を増やし、授業者と子ども／生徒の信頼関係を損なうという仮説を形成するに至った。

従来の先行研究のいう学習評価は観察者としての立場からのものがほとんどであった。対して、本研究で扱う学習評価は、授業者の立場に立ち、その目的を子ども／生徒の学習を支援し、その学力を高めることとする。そのため、授業の目的に合致するエビデンスを見取り、それを生徒の学力向上のためにフィードバックする一連の過程が学習評価として位置付けられる。授業者に焦点を当てることにより、フィードバックといった学習評価の結果及びそのための媒体の実際とその活用の論理を明らかとなる。

（３）本研究の意義は以下の２点である。

１つは、授業者自身による学習評価の方略の作成が可能となる点である。先行研究にある学習評価のための方略のほとんどは、その開発の論理、過程が示されていないため、一種の問題集として読まれ、扱われていた。このことが授業者の評価に対する自主性を阻み、授業と評価の齟齬を産む要因となっていた。本研究により、授業者自身の学習評価を可能とする論理が明らかとなる。

２つは、結果のフィードバックにつながる論理が提示される点である。生徒の序列化を助長する従来の学習評価に替わり、個々の生徒の学力保障につながる学習評価を可能にする。

以上、２つの意義を持つ本研究は、従来の学習評価に関する研究の問題点を克服し、個々の生徒の学力をどのように評価すればいいのかという評価の本質的な問いに答えようとする「評価研究」として位置付けることができる。

３．研究の方法

本研究では、生徒の学習状況を的確に判断しうる学習評価のためのツール及びその活用の論理として、学習評価方略を捉える。そのため、以下のような研究の方法をとった。

（１）社会系教科の３つの授業観（理解、説明、意思決定）を取り上げた。

（２）それぞれの授業観に基づく学習評価の方略及びそのツールを開発する。

①授業実践及び授業計画の分析から学習評価の方略及びそのツールを開発する。

②①で開発した学習評価の方略及びツールを用いた授業を行い、検証を行う。

（３）（２）で明らかにした枠組みに基づき、開発された学習評価方略及びそのツールを分析し、開発者の意図と授業観との対応関係を明らかにする。

取り上げた授業実践は以下の通りである。

- 「世界の貿易」（理解）
- 「明治時代について」（説明）
- 「わたしのライフプラン」（意思決定）
- 「震災からの復興を考える」（意思決定）
- 「情報について考えよう」（意思決定）

なお、社会系教科の３つの授業観（理解、説明、意思決定）については、アメリカ合衆国の学習評価問題を類型化した棚橋氏の論（棚橋健治「社会科の本質と学習評価」全国社会科教育学会『社会科研究』第 51 号、1999 年、pp. 1-10）に基づいて選択した。

４．研究成果

本研究では、社会系教科に見られる３つの授業観（理解、説明、意思決定）を取り上げ、授業実践の分析から論理的に導かれる学習評価方略を明らかにした。本研究のオリジナルな研究成果は、以下の 3 点に集約される。

第一の意義は、授業観に基づく学習評価方略を開発し、実践を通して検証した点である。

（１）体験を通した「理解」を基盤とした社会認識形成をねらった授業実践として大津和子氏による授業実践「世界の貿易」を分析し、学習評価方略を明らかにした。大津氏の実践は、優れた実践として評価されているが、「貿易ゲーム」に着目されることが多く、体験を通して得られる「理解」と社会認識形成との関係が明らかにされていなかったため、本研究では、授業者の学習評価方略という点から、理解と社会認識形成の関係を明らかにした。

（２）「意思決定」を通した社会認識形成をねらった授業として、溝口氏（溝口和宏「開かれた価値観形成をはかる社会科教育：社会の自己組織化に向けてー単元「私のライフプランー社会をよりよく生きるためにー」の場合ー」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第 13 号、2001、pp. 29-36.）の開発した単元「私のライフプラン」を分析し、学習評価方略を開発した。本単元は優れた「意思決定」の授業として評価されているものの「モデル」としての評価にとどまり、実際の学習における授業者の指導の具体及び学習評価の観点が明らかとはなっていなかった。本論文の分析を通して、本単元の実践可能性が高まったと言える。

第二の意義は、本研究で得られた分析枠組みに基づき、授業実践者の意図の相違点を明らかにした点である。

（１）「意思決定」を通した社会認識形成をねらった授業として、坂田氏による実践「震災からの復興を考える」（小６）のプロトコル分析を行い、授業を成立させるための手立てを明らかにした。また、その結果と授業実践者の意図との相違点を明らかにした。それにより、授業実践者の経験に基づいた授業観をより具体的に提示することができた。
（２）「説明」を通した社会認識形成をねらった授業として、甲斐氏による単元「明治時代について」（高２）を分析し、単元を通して形成的評価として実施された小テスト及び総括的評価として行われた中間テストを分析し、それぞれの学習評価方略が評価している知識の質を明らかにした。また、その結果と授業実践者の意図との相違点を明らかにした。それにより、授業実践者自身の授業観以上に社会的な要請が、学習評価方略の作成に影響を与えることが明らかとなった。

第三の意義は、本研究で得られた分析枠組みに基づき、学習評価方略で得られた結果を生徒の学習へフィードバックを意図した実践を開発した点である。
「意思決定」を通した社会認識形成をねらった授業として、授業実践「徳島タワーについて考えよう」（小６）及び授業実践「情報について考えよう」（小５）、授業実践「自動車産業について考えよう」（小５）を開発した。これらの実践は、開発から、実践、学習評価及びその結果を受けての学習者へのフィードバックまでの一連の過程を本研究の枠組みに基づいて行ったものである。これにより、本研究で提示した学習評価方略が授業開発、実践、評価において活用できることが明らかとなった。

以上３点の研究成果を通して、社会系教科の代表的な授業観（理解、説明、意思決定）に対応した学習評価方略とその理論的背景を実証的に示すことができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

（1）井上奈穂、授業者による学習評価の論理－大津和子の実践「世界の貿易」の分析から－、査読無、第 28 巻、2013、80-90
（2）井上奈穂、社会系教科における授業者による学習評価の論理－「決定・判断」を基盤とした授業の場合－、鳴門教育大学研究紀要、査読無、第 27 巻、2012、100-110

〔学会発表〕（計５件）

①井上奈穂、社会科授業における学習評価方略の構成－高等学校日本史Ａの実践を事例に－、全国社会科教育学会、2012、10、21、岐阜大学
②井上奈穂、教員養成における授業開発を通した社会科教材開発力の育成、中日教師教育学術研究集会、2012、9、15、北京師範大学（中華人民共和国）
③井上奈穂、「社会的判断力」育成を目指す社会科授業の成立要件－坂田実践「震災からの復興を考える」の場合－、鳴門社会科教育学会、2012、7、28、鳴門教育大学
④井上奈穂、教員養成におけるフィードバック過程を意識した授業開発・実践、日本教科教育学会第 37 回全国大会、2011、11、12、沖縄大学
⑤井上奈穂、社会系教科における学習支援の方略－授業実践「制度について考えよう」を事例に－、日本社会科教育学会第 61 回全国研究大会、2011、10、23、北海道教育大学

〔図書〕（計１件）

（1）井上奈穂、社会科における評価方略、社会認識教育学会編、新　社会科教育学ハンドブック、2012、237-280

６．研究組織
(1)研究代表者

井上　奈穂（INOUE NAHO）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・講師
研究者番号：00580747